

スポーツによる国政の転換は可能か？

一 昭和 15 年東京オリンピック招致活動を事例として

古城 庸夫 (江戸川大学)

1. はじめに

平成 28 年 (2016 年) 第 31 回夏季オリンピック大会の招致に向けて、東京都は立候補を表明した。この大会が東京都に決定すれば、アジア地区では初めてとなる同国での 2 回目の開催となるが、実は昭和 15 年 (1940 年) 9 月に開催が決定していた東京オリンピックがあった。

本研究では、「幻の東京オリンピック」と呼ばれているこの大会の開催が決定された昭和 11 年 (1936 年) 当時の日本を取り巻いていた世界情勢と、困難と思われた東京大会招致を実現した人々の関係を通して、スポーツと国政の関係について明らかにすることを目的とする。

2. 近代オリンピックに至る時代背景

当時の日本は、明治 28 年 (1895 年) の日清戦争で勝利したことにより、朝鮮半島から清国の影響力を無力化すると、台湾を領有し、明治 38 年 (1905 年) には、日露戦争の勝利によって朝鮮半島を完全に占領した。

一方ヨーロッパにおいては、大正 3 年 (1914 年) ドイツをはじめとした 5 カ国の中央同盟国と、イギリス・フランス・ロシアの三国協商を形成していた連合国との間で第一次世界大戦が始まった。日本、イタリア、アメリカも連合国側に参戦し、連合国側の勝利に終わると、アジアと日本国内において軍部からの発言力がますます強まっていった。

また、近代オリンピックの創立者であるクーベルタン男爵は、当時の青少年達が生きる希望を失っているのではないかと、憂慮していたと思われる。それは彼らが、幼少時に、フランスとプロイセン王国の間で戦われた普法戦争 (明治 3 年 1870 年～明治 4 年 1871 年) によるフランスの敗戦を経験していたこと、またパリを包囲したプロイセン軍とパリの労働者並びに国民軍の間で行われたパリ・コミューンの戦いで、敗戦のショックを受け経済的困窮に陥っていたからである。やがて、イギリスのアスレティシズム思想 (注 1) に影響を受けたクーベルタン男爵は 1850 年から行なわれていたウエノロックオリンピックに影響を受け、世界平和を願って近代オリンピック (第一回明治 29 年 1896 年) を創立したと言われている。

3. 中央と地方を結ぶパイプライン：西園寺公望と若槻禮次郎

嘉永 2 年 (1849 年)、京都で太政大臣になることのできる公家の一つである徳大寺家の次男として生まれた公望は、明治天皇の遊び相手として幼少期を送ると、早くから倒幕を志した。山陰軍事総督に任じられた後、明治 4 年 (1871 年)、パリ・コミューンで騒然としていたパリのソルボンヌ大学に留学した。またパリの下宿で、後にフランス首相となるクレマンソーと親交を深め、議会政治を元にして下級階層の生活改善を目指しながら国権の増強を図るとした急進主義に影響を受けた。一時帰国後、再びドイツとオーストリアの大使を務め、帰国後は政友会を設立し内閣を組織したが、明治天皇の崩御に伴い、首相指名のできる五元老のひとりとなり、以後政界において長く影響力を発揮した。

明治 39 年 (1906 年) 1 月、第一次西園寺内閣の時に大蔵次官であった若槻禮次郎は、西園寺の満州視察に同行し、軍部が長く満州に駐留する危険性を心配する西園寺の姿に感化を受けると、大蔵次官を辞任し、勲選議員として桂太郎 (西園寺公望と交代で総理大臣を三度務め桂閣時代を現出した) の創設した立憲同志会に入会した。その後、大蔵大臣、内務大臣を務め、大正 15 年 (1926 年) 第一次若槻内閣、昭和 5 年 (1930 年) ロンドン軍縮会議では首席全権として条約を締結し、昭和 6 年 (1931 年) 第二次若槻内閣を組織した。若槻は今日でも平和主義者として知られているが、こうして、中央と地方を結ぶ人脈のパイプラインができあがる。

4. 官と民の結び目：若槻禮次郎と岸清一

慶応 2 年 (1866 年) 2 月 5 日、島根県松江市雑賀町に下級藩士の次男として生まれた若槻と、慶応 3 年 (1867 年) 7 月 4 日に島根県松江市雑賀町に下級藩士の次男として生まれた岸清一は、血のつながりはないが近い親戚であった。

やがて松江中学校を卒業し、就学補助金を得た岸清一が東京大学予備門に合格すると、一年後れて、若槻も司法省法律学校入学を果たした。入学後の岸は英人ストレンジの教えを受け、ボート選手として第一回ボートレースのチャンピオンとなり活躍した。若槻は第一高等学校を経て帝国大学仏法科を首席卒業したが、在学中はボート部の選手として岸達と同じレースに参加したりした。また卒業後は、学士競漕 (OB レース) に他の卒業生達と参加している。

若槻が他の大学生と同じように官職に付いたのに対して、岸は国際弁護士として活躍する道を選んだが、若槻が政治家になるにしたがって、岸は財界とのつながりを深めて行った。明治 42 年 (1909 年)、駐日フランス大使ゼラールが嘉納治五郎に国際オリンピック委員への就任を求めたとき、すでに岸は、別件による海外渡航の合間いくつかのオリンピックを視察していた。すなわち、明治 37 年 (1904 年) 第 3 回セントルイスオリンピック (アメリカ)、明治 41 年 (1908 年) には第 4 回ロンドンオリンピック (イギリス) を視察し、政府財政委員としてロンドンとパリに駐在していた若槻とも会っていた。

近代オリンピックは、第 4 回ロンドンオリンピック大会から、初めて国別参加形式が取られた。だが、軍備増大による経費削減のため参加国が少なくなることを懸念したクーベルタン男爵は、急速に列強の仲間入りを果たしていた日本へ参加要請をしたのではないかと。そう仮定すれば、クレマンソーから前総理の西園寺公望を通して、桂太郎総理と大蔵事務次官の若槻禮次郎に適当な人選の照会があり、軍部の意向を慮った政府が、非公式

の推薦として岸を派遣した、というつながりが見えてくる。

5. スポーツと政治の結び目：ポート人脈と嘉納治五郎

当時嘉納治五郎は海外で有名な日本人の1人であったと思われるが、それは、明治22年(1889年)当時、既に嘉納の弟子達がフランスで柔道の指導を行っていたからである。またドイツでは、大使の西園寺公望とも親交を深め、フランスではリヨン大学に留学していた梅謙次郎(民法学の父・島根県松江市出身松江藩医の次男として生まれ東京外国語大学出席出身後法學博士、東京大学教授、現法政大学の校長などを歴任、岸達と同じポートルースに出場し学生クルーのゴックスを務めている)とも面会したと思われる。嘉納はポートを漕いだ経験もあり、熊本の第五高等学校長時代にはポート部を廃するなどあまり理解を示していなかったが、講道館を財団法人化するに当たっては、成案を法學博士の梅謙次郎の手により完成し、法人の理事には若槻も就任している。

明治23年(1890年)には、補国のためにスエズ運河を経てインド洋に向かう船上で、ロシアの海軍士官との試合において、相手を投げ飛ばした際に相手に怪我をしないように襟を引いた態度が「武士道的で素晴らしい」と読売新聞によって広く国内に広められた、というエピソードもある。これは、明治33年(1900年)、新渡戸稲造が著した『BUSHIDO: THE SOUL OF JAPAN』により世界中に武道ブームが起っていた、ということとも無関係ではないと思われる。

6. 嘉納と近代日本スポーツ：大日本体育協会の設立

承認を経てアジア初のIOC委員となった嘉納は、明治45年(1910年)に開かれる第5回ストックホルムオリンピック大会出場に向けて、日本代表を決定しオリンピック大会に出場する資格を認定する組織作りに取り掛かったが、東京帝国大学、早稲田大学、慶応大学などからの賛成を受け、大日本体育協会の事務所を東京市小石川区大塚窪町の東京高等師範学校内に置き、その一つとしてオリンピック委員会をつくった。

また、設立当時の組織は学校関係者が多かったために、必要経費は有志の寄付で賄った。それらを翼賛員と呼び、その数は24名にのぼったが、多くはスポーツ界と財界人であった。

その内訳は、会長の嘉納をはじめ、西園寺公望、洗足栄一(日本資本主義の父)、岩崎小弥太(三菱財閥4代目総帥)、古河虎之助(古河財閥3代目当主)や岸清一(日本漕艇協会初代会長、大日本体育協会第二代会長、二人目のIOC委員、協会の赤字解消をたびたび囑かれた、現在も活動中の出雲学生会を創立し松江出身の多くが会員となった)平沼亮三(日本市民スポーツの父、ポート経験者)添田寿一(日本興業銀行初代総帥)志立鐵太郎(岸の同郷で東京大学の同級生ポート選手、日本興業銀行第二代会長)などの早々たるメンバーであった。

しかし、協会は慢性的な財政難に陥っており、嘉納たちがストックホルムオリンピックに出発している間に訪れたフィリピン体育協会理事であるエルウッド、S、ブラウン(アメリカYMCA)の強硬な要請による上海・マニラ・日本三国による「極東オリンピック大会」開催の要請に応えることが出来なかった。またそれ以降は、国内に湧き上がってきた海外大会(オリンピック・極東大会)への派遣希望の増大や協会の選手選考方法などの体質改善を求めた世論の高まりに対応するために、青森県で官選知事をしてきた武田千代三郎(岸と同じ第一回ポートルース優勝者クルー、駅伝の命名者で山梨・秋田官選知事、日本で始めて開かれた陸上競技大会の優勝者)を東京の帝國海軍協会(イギリスに習い寄付で軍用船の建造を行った協会)の評議委員に転籍させてから大日本体育副会長に迎え、陸上関係者との軋轢を解消しようとしたと考えられる。

しかし、嘉納と武田の両者は並び立えず、武田は任期を残して大正11年(1922年)大阪高等商業学校に去って行った。また、当初岸を副会長に推薦しようとしたが、極東大会問題の解決を図るために、大正6年(1917年)極東体育協会の競技委員長と副会長に推薦され、日本で始めて開催された第三回極東選手権競技大会において、日本を初めての総合優勝に導いたのであった。

7. 岸清一とオリンピック

明治45年(1912年)、明治天皇の崩御に続いて大正3年(1914年)皇后が亡くなると、遺徳をしのいだ国民から夫妻を祭る神社の建設を求め声が高まっていき、大正4年(1915年)、明治神宮の建設が発表された。その際、嘉納治五郎の提言で明治神宮外苑競技場の建設が決定され、大正12年(1923年)に起きた関東大震災のために一時中断したが、大正13年(1925年)、ストックホルムオリンピックのスタジアムを模して一周400m1万5千人収容のスタンドと5万人を収容できる芝生席を設けた競技場が完成した。また、スポーツに対する国民の関心もオリンピック大会でメダルが徐々に獲得されるようになってきたことでさらに高まってきた。このことを受けて、大正13年(1924年)、内務省の主催で第一回明治神宮競技大会がポートルースをはじめとした15種目で行われ、内務大臣の若槻が祝辞を述べたが、この大会が後の国民体育大会の成立に影響を与えている。

また、大正10年(1921年)に度重なる体協の改革要求を受けると、嘉納が名誉会長に就任したことに伴い、大日本体育協会会長に就任した岸は、選手を引率して、大正13年(1924年)第8回パリオリンピックに参加した。しかし、オリンピックを機会に開かれる国際陸上競技連盟に、大日本体育協会以外の日本人の陸上競技団体が単独で加盟しようとした問題が起ったため、もと体協理事で日本大使館の参事官を務める杉村陽太郎(嘉納塾出身後柔道6段、第一高等学校の途中から東京大学の途中までポートルース)らの協力を得て、国際陸上競技連盟会長ジークフリード・エドストローム(後第4代IOC委員会会長)に事情を説明し、支援を得た。このことにより体協の加盟が認められ、以後長い友情を最後まで保つことが出来たと推察される。

昭和2年には、体育に貢献したとしてフランスからオフィシエ・ド・レジェンドノール賞を授与された。また岸は、昭和3年(1928年)第9回アムステルダムオリンピックにボート選手を始めとした選手を引率して参加して以降、たびたびボート関係者に東京オリンピック大会の招致について語るようになっていった。昭和6年(1931年)、第二次若槻内閣誕生後の満州事変勃発をへて、昭和7年(1932年)第10回ロスアンゼルスオリンピック大会に選手団を引率して乗船した船には、復讐ともフィリピンやインドなどの選手団と各国の大会関係者も含まれていた。

またその際は、東京オリンピック大会招致のためのロビー活動として、8月3日の夕刻からカルフォルニアのアンバサダーホテル4階で、岸が主催した晩餐会でIOC委員会総会に東京市が立候補したことを東京市の市会議員とともに報告したのであった。なお、当日の晩餐会に参加したメンバーは嘉納委員をはじめ、東京オリンピック決定に票を投じることが出来るエンドストローム等、各国IOC委員とその婦人も多く含まれており、総勢50名以上にのぼる盛大なものであった。

また、帰国時の船にも、日本を経由して帰国するIOC委員や各国の選手も同乗していたので、それらの記事が新聞に掲載されると、国内のオリンピック招致は熱が高まっていった。そして、メダルを多数獲得したことにより、天皇陛下に対するご進講で、岸はアメリカにおける日本人への排斥感情などの状況やオリンピック招致の可能性についても実現の可能性が高いことを話している。

8. 天皇家とボート

明治維新後の新政府は海軍の充実を図っていたので、海兵の訓練のためにもカッター訓練はよく行なっていた。明治16年には、隅田川で始めてボートレースに先駆けてカッター競走を行ない、明治天皇も行幸し賞金を出すなどしていた。

又たびたびボートレースに足を運び東京大学や学芸院のボートレースも天覧したりしたが、特に大正天皇は、学生のボートレースをモーターボートに同乗して観戦することを好んだ。それらの行事には、東京大学でボートを漕いでいた林權助(後大使、宮中御用係)山口鋭之助(島根県松江市出身、後学芸院院長、後宮中顧問官)などがたびたびお供を勤めた。さらに、秩父宮殿下と高松宮殿下は、ことにボート競技を愛好し、イギリス製のシングルスカルを購入して、浜離宮の池や隅田川の尾久コースなどでボートを漕がれた。そして現在でも、ボートレースには秩父宮杯として名前を残している。

9. テロリズムとスポーツ政策「冬の時代」の到来

西園寺ら平和主義者の協力を得てロンドン軍縮条約を締結させた第27代総理大臣浜口雄幸は、昭和5年(1930年)、過激的軍備増強派に東京駅で腹部を銃撃され重症を負った。また昭和6年(1931年)1月には、怪僧・井上日召の政府転政計画が露見したが、この計画で標的にあげられていたのは、西園寺や若槻、井上準之助などであった。さらに3月事件では、軍人の一部と政治家の一部が物担して1万人規模のクーデターを計画した。それから、満州事変が勃発すると、4月には若槻が第二次内閣を組閣したが、10月にも陸軍の過激派が再びクーデターを企てた。これらは未然に防がれたが、昭和7年(1932年)には、大日本体育協会の初代委員長でもあった井上(政治家)と三井財閥総裁岡田琢磨が過激派により暗殺され、5月には5・15事件が勃発し第29代総理大臣犬養毅が暗殺された。

日露戦争の勝利で軍備の増強を望む声が国内に高まっていったことも背景にして、昭和7年(1932年)10月、東京市議会は皇紀2600年を記念して第12回オリンピック開催を議決している。そのこともあり、さらに当時の新聞記事から岸の発言を引用して、岸は東京オリンピック招致に対して消極的で、昭和5年(1930年)第14代東京市長になった永田秀次郎が衝突に東京大会招致を言い出したようにとらえる向きもある。

ただ、岸が発言したのは、まさにこのような状況下でのことであり、会場建設等に膨大な資金と鉄材を必要とするオリンピック招致などは、危機意識が高ければ発言できなかったのではないかと思われる。官選で選ばれた東京市長永田秀次郎が、第三高等学校時代、琵琶湖で行われた第一回全国中学校競漕大会ですでにボート界では高名であった岸や杉村達などを係員として補佐しており、続く東京市長中村是公が、東京大学時代、10年間もボート選手として活躍していたことからすると、東京市議会の決議が、ボート界＝岸の意向・真意であろうことは、容易に推察される。

けれども、昭和8年(1933年)、岸は急激な喘息の発作であっけなく死んでしまう。岸が死亡したのは第7回明神宮競技大会の最中であったため、その葬儀はスポーツ葬の状況を呈した。青山斎場の入り口は200以上の花輪で埋め尽くされ、各関係競技団体の代表が会旗を先頭に参列した。皇室関係、政財界も含めると参列者は2千人以上にものぼった。

その後、東京オリンピック招致は、嘉納や杉村らの努力によって、ようやく決定を見た。

ただ、国際連盟事務局長を務め、IOC委員となった杉村陽太郎が惜しまれつつ早世し、東京オリンピック大会開催決定を知らせる帰国途中の水川丸船上で嘉納が死亡すると、もはや軍部を抑えてオリンピックの開催を推進すべくも無く、はからずも戦況の悪化により、日本はオリンピック開催を辞退することになってしまった。

10. おわりに

昭和39年(1964年)東京オリンピックの開催が近づいた9月30日、岸の銅像の除幕式が島根県庁で行われたが、ロスアンゼルスオリンピックから大会に関わっていた主賓のIOC会長アベリー・ブランデー氏は、時の東京都知事がかつて東京大学でボート選手であった東龍太郎(医学博士、IOC委員、第六代日本体育協会会長)であるにもかかわらず、「東京オリンピックは岸の偉業である」と挨拶したのである。このことは、戦前の日本における国際的なスポーツ政策が、卓越した個人のロビー活動の上に立脚していたことを伺わせる。

けれども、生前、岸が駐米大使就任を要請されていることを漏らしていたことからすると、この時代に語学に堪能でスポーツを通して培った豊富な人脈を持つ駐米大使が誕生していたら、いかに細き道とはいえ、その後の時代に対する影響は少なからぬものがあったであろう。

ここに我々の学ぶところがあるが、昭和15年幻の東京オリンピックと呼ばれた大会の招致運動が成功した中で、岸の果たした役割は、さらに今後の研究を待たなければならぬ。

注1. アスレティシズム思想

19世紀のイギリスでジェントルマンとしての立ち居振る舞いを習得するために、パブリックスクールやオックスフォード・ケンブリッジ大学等で行われた集団的スポーツであるクリケット・フットボール・ローイングなどの実践を通して理想的な人格形成を計ろうとした思想

引用文献

2016年東京オリンピック基本方針 東京都

日本体育（身体運動）・スポーツ再考Ⅴ 栗栖満

岸清一伝 岸同門会

若槻禮次郎自伝 古風庵回顧録

嘉納治五郎 私の生涯 日本図書センター

近代体育スポーツ年表 岸野雄三他

大日本体育協会史 大日本体育協会

日本体育協会50年史 日本体育協会

ボート100年 宮田勝善

東京大学漕艇部100年史 東京帝国大学漕艇部

新ボート100年 岸清一物語 古城藩夫

スポーツ八十年史 日本体育協会

東京帝国大学漕艇部50年史 東京帝国大学漕艇部

欧州に於いて 実業之日本社

中村是公と漱石 青柳達雄 勉誠社

若槻禮次郎 国民に訴ふ、改造社

漕艇75年 日本漕艇協会

日本ボート競技データファイル 日本ボート協会